様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年１２月１４日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008～2009
課題番号：20730554
研究課題名（和文）　日米における幼小連携した音楽カリキュラムについての比較研究
研究課題名（英文）　A Comparative Study of Music Curriculum in Kindergarten and Elementary school between the United States and Japan.

研究代表者
早川　倫子（HAYAKAWA RINKO）
岡山大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：60390241

研究成果の概要（和文）：

本研究は，幼小連携した音楽カリキュラムのあり方にについて考察を行ったものである。第一に，日本と米国の国レヴェルでのカリキュラムを分析した上で，米国の小学校(幼稚園を含む)の音楽授業の調査・分析を中心に行った。第二に，日本における音楽の授業実践を参観・調査しながら，さらに全国の小学校(無作為抽出)に対して低学年の音楽活動についてのアンケート調査を実施した。これらの調査・分析から，「身体における音楽的概念の獲得の重視」という点については，特に幼小連携した音楽カリキュラムの構成において重要であると考えられた。

研究成果の概要（英文）：

In this study, I considered the concept of music curriculum in kindergarten and elementary school. First, I investigated music classes in the United States, comparing difference of the contents on national curriculum of the United States and Japan. Second, I surveyed about music activities in the first, second grades at elementary school in Japan (random sampling). The result shows that “acquisition of musical concept in the body” is important to construct a music curriculum in kindergarten and elementary school.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２００９年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：教科教育学
科研費の分科・細目：音楽科教育
キーワード：幼小連携，音楽カリキュラム，日米の比較，音楽的概念，音楽授業

１．研究開始当初の背景

近年わが国において，幼小連携カリキュラムの開発は，教育改革・教育研究における重要な課題となっている。しかし，そのような

研究が進められるのは，日本では主に文部科学省が指定した研究校や，幼稚園と小学校が併設された学校においては可能であるが，一般的な学校での連携は難しい状況にある。また，わが国では，幼小連携の理念(理想)は掲げられているが，実際に『学習指導要領』の内容が連携された形で示されているとは言いがたい。

また，音楽教育に関しても，義務教育における音楽科の存在意義が問われている今日において，人間成長をトータルに捉えた音楽教育の意義を再考する必要性も出てきている。

筆者はこれまでに，20 世紀米国における音楽教育思想について，特に戦後の米国の音楽教育界で中心となった美的教育思想とその影響の下に構築されたカリキュラムについての研究を行ってきた。その教育思想においては，幼児期と児童期の区切りはなく人間成長をトータルで捉えた教育観，音楽観が存在していた。

また，米国ではほとんどの小学校が幼稚園と併設されてあるということもあり，幼小連携のしやすい環境となっている。さらに，『全米芸術教育標準』(National Standard of Arts Education,1994,以下『標準』と略す)においても，幼稚園から高校までの一貫した芸術カリキュラムの構成が見られる。このように，米国では国レヴェルで出されたカリキュラム自体にも，幼小一貫した教育内容の標準が示されているのである。

そこで，本研究では，米国と日本の具体的なカリキュラムや実践についての比較分析を通して，幼稚園・小学校の連携した音楽カリキュラムのあり方について考察したいと考えた。

２．研究の目的

本研究は，幼小の連携した音楽カリキュラムのあり方にについて，日米のカリキュラムと授業実践事例を分析することによって，比較検討を行うものである。

日本と米国における国レヴェルでのカリキュラムを鑑みながらも，特に，実際の幼稚園･小学校の学校レヴェルでの実践事例を調査・分析することによって，幼小連携の音楽カリキュラムの実態を明らかにする。また，授業実践⇔学校カリキュラム⇔国（地方自治体）カリキュラムとの相関関係を明らかにし，日米の視点で比較することによって，わが国における幼小連携した音楽カリキュラムの問題点や今後のあり方を考察していきたいと考えた。

３．研究の方法

本研究は，国レヴェルのカリキュラムの比較分析にとどまらず，実際の授業実践を調査し，子どもたちの学びの様相からそのカリキュラムとの相関関係を探るものとする。

研究期間内に明らかにする内容と方法は，以下の 3 点である。

(1) 日本の『学習指導要領』および米国の『標準』の比較分析により，幼小連携の視点から見た音楽カリキュラムの特徴や相違点を明らかにする。

(2) 日本および米国において，幼小連携で音楽カリキュラムを構成している実践校について調査し，事例分析を通してその実態を明らかにする。

(3) 授業実践の実態と学校レヴェルのカリキュラムおよび国レヴェルのカリキュラムの相関関係を分析し，日米の相違点を明らかにする。

４．研究成果

(1) 米国の音楽カリキュラムと授業実践の調査と分析より

本研究では，第一に，日本と米国の国レヴ

ェルでのカリキュラムを分析した上で，米国の公立小学校(幼稚園を含む)の音楽授業の調査・分析を中心に行った。今回調査の対象としたのは，コネチカット州イーストライム公立学校(幼稚園および小学校)のカリキュラムと授業実践である。

その結果，① 幼児期と児童期の区切りのない人間成長をトータルで捉えた教育観，音楽観の存在が，実際の音楽教師の指導観や授業の中に反映されていたこと，②米国ではほとんどの小学校が幼稚園と併設されているという点，『全米芸術教育標準』をもとに，各州・学区・学校がカリキュラムを構成し幼小一貫した教育内容の標準を示している点，また調査を実施した小学校では，同一の音楽教師が幼稚園の音楽の授業も実施しているという点など，日本とは異なる物理的な条件が，実際の授業内容に大きな影響を与えていること，③様々な音楽活動において，身体における音楽的概念の獲得を重視していること(読譜指導の実践事例分析より)，が明らかとなった。

(2) 日本における音楽の授業実践の調査より
～アンケート調査を中心に～

本研究では，第二に，日本における小学校の音楽の授業実践を参観しながら，さらに全国の小学校(無作為抽出)に対してアンケート調査を実施した。この調査は，第一の米国の調査・分析で得られた3つの視点をもとに調査したものである。

アンケート調査の対象は，全国の小学校1000校を無作為抽出して実施した。なお，岡山県に関しては，研究代表者が岡山県在住のため，詳細な調査分析を行うために全校(423校)に送付した。アンケートの回収率は，岡山県が51.5%，それ以外の都道府県が26.2%，全体で36.9%であった。

また，調査内容の中心は，[小学校低学年の音楽活動]についての教員の意識を問う内容となっている。しかし，関連事項として[小学校の概要], [学校全体の幼小連携または保小連携の取り組み]についての設問も設定した。特に本研究に関連する[小学校低学年の音楽活動]についての設問，中でも実際の音楽活動についての設問内容は，以下の資料１の通りである。

この設問の分析から，身体的な活動についての4項目すべてにおいては一番ポイントが高く、95%以上の教員が必要と考えていることが明らかとなった。反対に，頭声発声，楽譜の使用，鑑賞活動，言語活動，楽曲理解，即興については、他の項目に比べてポイントが低かった。また，日常生活との関連性などについてもポイントが低かった。

米国の授業実践や教師の指導観等と比較して，身体的な活動を重視しているという点では共通する部分があったが，即興や日常生活や他教科との関連という視点については，米国よりも意識が低く異なっている点であることがこれらの分析から明らかとなった。

資料１：

[小学校低学年の音楽活動について](一部抜粋)

設問（７）幼小連携のために、低学年の音楽活動おいて、どのようなことが必要でしょうか。あてはまる数字を一つ選んで〇をつけてください(4段階：４大変あてはまる，３あてはまる，２あまりあてはまらない，１全くあてはまらない)。

＜身体的な活動について＞

１．身体的な音・音楽の感得を重視すること

２．身体表現を多く取り入れること

３．歌唱活動と身体表現を関連付けること

４．聴く活動と身体表現を関連付けること

＜歌唱活動について＞

５．歌唱活動を多く取り入れること

６．頭声発声を重視すること

７．元気よく歌うことを重視すること
８．わらべうたを多く取り入れること
９．歌う際、楽譜を用いること
10. 教材は声域に合ったものを用いること
11. 幼稚園で歌われる歌を取り入れること

＜器楽活動について＞

12. 器楽の活動を多く取り入れること
13. できるだけ簡易の楽器を用いるようにすること
14. 楽器の音色の選択を重視すること
15. 奏法の基礎的な指導を重視すること
16. 自由に楽器に触れるような形で活動を実践すること
17. 多様な楽器（和楽器、民族楽器など）を取り入れること

＜聴く活動について＞

18. 様々な種類の音を聴くことを重視すること
19. 自然の音を聴くことを重視すること
20. 楽曲の鑑賞を多く取り入れること
21. 聴いたことを言葉で表わす活動を取り入れること
22. 楽曲の内容を理解することを重視すること

＜音楽づくりについて＞

23. 音楽づくりの活動を重視すること
24. 即興表現を重視すること

＜その他＞

25. 基礎的な読譜指導を重視すること
26. 生活の中の身近な音楽的要素に気づくことを重視すること
27. 身近な素材を使って、楽器作りを行うこと
28. 他の教科や分野との関連性を重視すること
29. 生活の中の活動と音・音楽を関連付けること（座るときの合図等をピアノや歌で表現するなど）

（３）まとめと今後の展望

本研究を通して，日本および米国において，それぞれのカリキュラムの構成や授業形態等，物理的な点で異なる部分はあるが，幼稚園から小学校低学年の音楽活動の実際については，授業の中で「身体における音楽的概念の獲得の重視」という点で共通であることが明らかとなった。しかし，その身体的な活動においても質的に異なる部分もあるということが，日本および米国の小学校の音楽授業の実際より感じ取れた。それは，概念の意識が先にあるかどうかという点である。米国では，身体的な活動が先にあり，音楽的な概念の把握は自然と後からついてくるという意識が強いということ，一方で日本では，音楽的な概念を先に(視覚的に意識化することが多い)インプットし，それについて身体的に感じ取ってみるという方法が多いように読みとれた。また，即興や日常生活との関連性，他教科との関連性という点でも，米国に比べて日本のほうが，意識が低いということが考えられた。これは，カリキュラムの構成や内容の違いが影響している点であるとも考えられた。

今回調査を行ったのは，日本・米国共に一部のカリキュラムや授業実践であり，カリキュラムと授業等の相関関係を明らかにするまでには至らなかった。また，幼小連携した音楽カリキュラムのあり方に関しても，活動の特徴において一部の示唆を得たに過ぎず，カリキュラム構築へ向けたデータの収集という点では不十分であり，今後の課題として残っている。したがって，今後引き続き日米両方の音楽授業や音楽活動の実際を参観し，それぞれの特徴を質的に分析することを積み上げていくことが必要であると考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① 早川倫子，「米国の小学校音楽カリキュラムについての事例研究～コネチカット州イーストライム公立学校を中心に～」，岡山大

学大学院教育学研究科『研究収録』，査読無，第141号，2009，85-89

② 早川倫子，「米国小学校の音楽授業に見る読譜指導の実際～コネチカット州イーストライム公立学校の授業参観を通して～」，日本音楽教育学会『音楽教育実践ジャーナル』，査読有，vol.7-1，2009，67-75

６．研究組織

(1)研究代表者

早川　倫子（HAYAKAWA RINKO）
岡山大学・大学院教育学研究科・講師
研究者番号：60390241

(2)研究協力者(海外調査協力)

桐原　礼　（KIRIHARA AYA）
東京学芸大学・大学院連合学校教育学研究科・博士課程大学院生

(3)研究協力者(国内調査データ分析補助)

石井　宏美　（ISHII HIROMI）
岡山大学・大学院教育学研究科・修士課程大学院生

梶原　慶子　（KAJIWARA　KEIKO）
岡山大学・大学院教育学研究科・修士課程大学院生

篠原　優香　（SHINOHARA YUUKA）
岡山大学・大学院教育学研究科・修士課程大学院生